

推定山田道の調査

昭和49年3月～4月

飛鳥資料館の関連工事に伴う調査である。調査地は桜井市山田山崎にあり、高家丘陵の北西裾にあたる。調査の結果、この地域は丘陵斜面を田圃にしたため、かなり削平されていたが、調査地北端において、東西に延びる溝を1条検出した。溝は東西方向に20mまで確認したが、さらに続いている。溝幅は4m、深さ1mあって、東へ流れる。溝中の堆積土は3層に分かれ、流路の変化があったことを示している。遺物は溝埋土より7世紀後半の土器、瓦が出土した。なかには山田寺重弧文軒丸瓦もある。

溝は現県道桜井－橿原線の旧道南5mに平行する。この位置は岸俊男氏が山田道を想定している場所に当るので(注1)、発見の溝が山田道の南側溝である可能性も考えられる。かりに、調査地から西1.4kmにある小墾田宮推定地の調査で検出した東西溝SD020, 202を山田道の両側溝とすると、今回調査の南側溝は、この場所でわずかに北にふれている。なお、この溝を東へそのまま延長すれば、山田寺南門推定地の南辺につながる位置になる。ただし、今回の調査では、検出した溝の性格を断定するまでには至らなかった。今後県道沿いの調査によって、この問題を検討する必要がある。

注1 岸俊男「飛鳥と方格地割」『史林』第53巻4号 昭和45年